資料１

防災推進国民大会

テーマセッション

地域はもっと強くなれる

～多様な主体による防災の現場～

実施結果・取りまとめ

内閣府（防災担当） 普及啓発・連携担当

2018年3月8日版

第四回　ジェンダーと防災に関する有識者懇談会

平成29年11月26日「防災推進国民大会2017」（仙台）において、ジェンダーと防災に関する懇談会の議論を参加者とともに考えるため、テーマセッション「地域はもっと強くなれる～多様な主体による防災の現場～」を開催した。

防災の現場でのジェンダーの課題を理解していただきやすくするため、寸劇形式とした。

配慮した点：

・ジェンダー問題に関心がある者のみが集まらないよう、「ジェンダー」という文言をセッション名称から落とした。

・女性の課題のみが浮き上がり、男性対女性の構図にならないよう、男性が有する課題も取り上げた。

台本は、浅野委員に作成していただき、上記の点や演じやすさの観点から出演者全員で完成させた。

寸劇の概要

寸劇タイトル	出演者
1．津波からの避難計画づくり ➢ 自治会館にて。大地震で津波が発生することが予測された場合の避難計画について、自治会役員が作成した津波避難計画案をもとに、話し合う。	• 自治会長（男性・60歳代） • 女性部部長（女性・60歳代） • 民生委員（女性・70歳代） • 子ども会役員（男性・40歳代）

代表的なせりふ

- 「昼間、家にいることの多い主婦の方には、支援者として期待しています」（自治会長（男性・60歳代））
- 「主婦といっても最近は外に働きに出ている人もとても多く、昼間はお留守というお宅も多いんですよ。」（女性部部長（女性・60歳代））
- 「高齢者・障害者のなかでも、家族がいる方と一人暮らしの方では、必要な支援は違うのではないでしょうか。」（民生委員（女性・70歳代））
- 「地図づくりや避難体制づくりの話し合いの、最初の段階から女性部のメンバーが入っていたら、もっと細かい情報を入れられたかなと思います」（女性部部長（女性・60歳代））
- 「乳幼児世帯って言っても、子どもたちもすぐ大きくなるし、新しい子も生まれてくるし、人数を把握するのって結構難しいんじゃないかしら？」（民生委員（女性・70歳代））

メッセージ

- 高齢者・障害者・乳幼児・子どもなど、様々な異なる事情を抱え、多くの人にとって避難が難しくなる。
- しかし、個々人の事情（個人情報）を把握するのは難しい。
- 生活の実態にあった避難計画を、幅広い地域住民、企業なども協力して検討する必要がある。

寸劇タイトル	出演者
2. 避難所運営ってたいへん！？ ➢ 大規模災害を受けて開設された避難所にて、避難者から避難所運営者に、様々な要望が寄せられる。	• 避難所運営委員長・地域役員経験者（男性・60歳代） • 行政職員（男性・30歳代） • 炊き出し担当（女性・70歳代）　• PTA役員（女性・40歳代） • 乳幼児の母親（女性・30歳代）　• 高校生（女性・17歳）

代表的なせりふ

- *（行政職員（男性・30歳代）に）*「ええと、ええと、・・・・生理用品が欲しいんです！できれば夜用のが。」（高校生（女性・17歳））
  ⇒（対応に戸惑ってるうちに高校生（女性・17歳）が立ち去ってしまい）
  「女性用品なんて俺に分るわけないだろう！」（行政職員）
- *（避難所運営委員長（男性・60歳代）に対して）*「私はこの学校のPTAの役員をしてるので、物資の相談とか育児関係の要望のとりまとめとか、お手伝いできますけど。」（PTA役員（女性・40歳代））
  ⇒「ありがたいが、防災のことが分かってない人に手伝ってもらっても、かえって混乱するんで遠慮しとくよ。」（避難所運営委員長（男性・60歳代））

食物アレルギーの相談にとまどう炊き出し担当

避難所で行政職員が倒れる

- *（乳幼児の母親（女性・30歳代）から、子どもの食物アレルギーに対して相談を受け）*「食物アレルギー？うーん、、、ごめん、今度、市役所の人に聞いておくから。いま忙しくて、手が離せないの。」（炊き出し担当（女性・70歳代））
- *（避難所運営委員長（男性・60歳代）が過労で倒れてしまい）*「私たち高校生も手伝えますので、言ってください。女性用の物資の受付なんかだったら、すぐにみんなでできます！」高校生、「炊き出しも、中華料理店のご主人とかレストランのコックさんに手伝ってもらったらどうでしょう？」乳幼児の母親（女性・30歳代）

  「そうか、最初からみんなにいろいろと担当をお願いして、一緒にやればよかったんだねえ（避難所運営委員長・地域役員経験者（男性・60歳代）

メッセージ

- 個々人には、女性用品・高齢者のおむつ・アレルギー持ちの乳幼児など多様なニーズがあり、個人の問題を避難所では地域全体で解決しないといけなくなる。
- 避難所運営を、行政と自主防災会が一手に担っていては、いつか限界が来る。地域の力を最大限活用できるようにした方がよい。

寸劇タイトル	出演者
3. 生活再建の途上で… ➢ 復興期の大変さは、人によって様々。それぞれ異なる問題を抱えた4人3組の被災者の考えを聞く。	• シングルマザー（女性・40歳代） • 仮設住宅で妻を介護する男性（男性・70歳代） • 元飲食店経営の夫婦（男性・60歳代、女性・60歳代）

代表的なせりふ

- 「地震のあとの大津波で、自宅も母親も亡くしました。勤め先も廃業になり、失業しました。」「近所には保育園もなく、子供を預けられないので、新しい仕事も見つけられていません。」（シングルマザー（女性・40歳代））
- 「震災後に認知症が進んだ妻の介護をしています。わたしら夫婦は仮設住宅なんで、隣近所に知り合いはいないし、知らない人に助けてもらったり、迷惑をかけることもできません。自分たちのことは自分たちでなんとかするしかありません。」「先日は、つい、妻に向かって怒鳴ってしまいました。くたくたです。」「最後まで他の人に頼らずに妻の介護をやり抜きます。」（仮設住宅で妻を介護する男性（男性・70歳代））
- 「仲間たちも頑張ろうとしているんだし、なんとしてももう一度、商店街を再興しなくてはと思っています。もちろん不安もありますが、この町を再び元気にするためにも弱気にはなっていられません。さて、アンケートもちゃんと書くぞ！」（元飲食店経営の夫婦の夫（男性・60歳代））
- 「そういえば、復興まちづくりのアンケートってどうして各世帯に1枚しか来ないのかしら？お父さんが答えればそれでいいのかしら？私や息子は回答しなくていいの？」（元飲食店経営の夫婦の妻（女性・60歳代））

メッセージ

- 生活再建の場面では、乳幼児を抱えている母親、老老介護中の孤独な高齢者男性など、個々人の置かれた状況は更に複雑になり、解決策が見出しにくくなっていく。
- 世帯を単位とするだけでは、把握しきれない声がある。

主なメッセージ

- 現状、地域社会の住民は多様性が増しており、これが地域の防災力にも影響を与えている。
- 今は多様性の良さを発現できていない
- 地域の多様な資源を発掘するよう、多様な主体が参加できるようにするべき
- 許容できない不幸におちいる主体への対応を考えるべき
- 多様性の全てを理解・共有しきることはできなくても仕方ないと割り切る
- 地域の力の最大化　多様な主体の参画
- 最大不幸の最小化　社会構造の改善、セーフティネット
- 多様な主体が参加することで、地域は実はもっと強くなれる余地がある。
- 男女共同参画は、多様性のある地域の防災力を考える上で、重要な位置づけにある。